

令和3年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価（3月30日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	自立と社会参加をめざし、キャリア教育の観点から教育内容を見直すとともにわかっている授業を行うための授業改善を行う。	① カリキュラムマネジメント実施計画に沿って、自立と社会参加の観点から教育課程の見直し、学習内容の検討を行う。 ② ICT 機器を有効に活用し、よりわかりやすく、主体的に学ぶ授業づくりを進める。	① リーダー会を中心に、実施体制の整備、年間スケジュールと具体的実施方法を検討し、研修会を通して職員の実施計画に沿って、系統性の視点をもち、各学部を中心に組織的に検討を進める。 ② ICT 活用の取り組みの情報交換やミニ研修会などを行い、誰もが取り組みやすい効果的な活用方法について共有する。	① ・カリキュラムマネジメントの理解が深まり、現在の課題の改善に取り組むことができたか。 ・学校全体のカリキュラムマネジメントの方向性を定め、整理と検証を進めることができたか。 ② ICT活用の取り組みが活性化し、授業の工夫、改善が図られたか。	①校外行事の目的・内容の系統性を整理した一覧表を作成した。小学部、中学部、施設訪問部七沢学園の3部門の日課表について、学習指導要領の指導内容を日課表のどこで指導するかをより明確にしたものに改訂した。 ②ICTを活用したリモート校外学習、個別のオンライン授業、授業参観等実施した。職員が主体的にミニ学習会を計画し、情報交換が活発に行われた。	①全職員がカリキュラムマネジメントの必要性や実施内容について考え、推進する意識は薄かった。より目的と内容について共通理解の上で実施することが必要である。②ICT機器の有用な活用をさらに進めるとともに、児童生徒の自立と社会参加に向けた授業実践について、検討していく。	学校運営協議会（以降CSと表記）における報告及び協議結果。 ①「カリキュラムマネジメント実施計画に沿って教育課程の見直し、学習内容の検討がすすんだ」の項目の教職員アンケートでは75.7%と一定の取組み評価となった。（昨年度は20.2%） CSでの意見：自立と社会参加へ向け、児童生徒と教職員が取り組んでいることがわかる。今後も継続していくことを望む。	①学部等を中心に、校外行事の系統性の整理、日課表の改訂を行い、次年度より運用する。学習指導要領の指導内容をより達成することを目指し日課表を改訂した。次年度検証していくと同時に、高等部、分教室においても検討していくことが課題である。 ②ICT機器の有効活用について、新たな取組みが始まったり職員間で学び合ったりするなど苦手意識の強かったICT機器の活用の取り組みが校内で広がり始めた。	①・学習内容の系統性の整理、日課表と学習内容の明確化を図る。 ・年間指導計画の書式を統一し、目的、指導内容を明確にし、それぞれの教科ごとに計画的な授業実践を行う。 ②より効果的にICT機器を活用する。
2 (児童・生徒) 生徒指導・支援	児童生徒一人ひとりのおかれている環境や障害の状況、発達段階を含む困難さに応じ児童生徒が主体的に学び、課題を解決する力を身に付ける指導・支援を行う。	① 全校共通のアセスメントの実践に向け、検討を進める。 ② 児童生徒の教育ニーズと支援ニーズに応じた実効性のある個別教育計画を作成し活用する。児童生徒が主体的に学び、自己選択・自己決定する力の育成を図る。	① 学校全体で継続的に活用できるアセスメント方法について情報の収集と検討をする。さらに、次年度における具体的な活用を目指し、活用方法の研修や試行をする。 ② ・個別教育計画作成の理解を深めるために、作成手引きを活用する。個別教育計画新様式の検証・改善を行う。 ・児童生徒の主体的な活動を促す指導・支援方法や授業実践について、教員間で共有する。	① ・全校共通で活用できるアセスメントの提案ができたか。 ・個別教育計画の作成や授業改善等への活用に向け、試行することができたか。 ② 児童生徒の主体的な活動を促す授業実践や個別教育計画の活用を通して、児童・生徒の変容が見られたか。	①全校共通で活用できるアセスメントとしてCLISP-ddの導入を目指し、今年度2回試行することができた。教職員アンケートを実施し、課題を整理した。次年度の導入に向けて準備を進めることができた。 ②個別教育計画前期評価の前に、作成のポイントについての研修会を各学部で実施した。目標や手立ての考え方を整理し、児童生徒の主体的な活動を引き出す授業実践にも反映させる取組みが増え、児童生徒の自己肯定感が高まる等、変容が見られた。	①全校共通アセスメントの導入に向け、全職員への周知と理解を図る。アセスメントを活用し、的確な個別教育計画の作成やより個々の実態及び課題に合った授業実践を行う。同時に検証も行う。 ②個別教育計画作成について、共通理解が不十分だったため計画作成段階で見直しをするケースが多数あった。作成のポイントについて研修会等を実施できるとよい。また、個別教育計画の活用方法についても検討を行う。	①教職員アンケートでは「全校共通アセスメントの実践に向けた検討が進んだ」に73%で取り組んだと評価。一方あまり思わなかった職員も20.3%おり、具体的な取組み方法と効果的な活用について周知、理解を図っていく必要がある。 ②保護者アンケートでは「個別教育計画の説明」について93%ができていると評価である。教職員アンケート「個別教育計画作成の理解を深める取組み」について90.5%と高い評価となり、年度途中に行った研修等での取組みにより高評価であると考えられる。	①全校共通で活用できるアセスメントの導入を目指し、試行し、次年度本格実施に向けた準備をすることができた。次年度実施し、アセスメントの活用につなげることが課題である。 ②個別教育計画作成前に作成についてのポイントについて各学部等で研修を実施し、職員への周知と内容の整理をすることができた。次年度は個別教育計画作成時のアセスメントの活用方法、個別教育計画の授業づくりへの活用方法について取り組むことが課題である。	①全校共通のアセスメントとしてCLISP-ddを導入し、活用の成果について検証を行う。 ②個別教育計画作成の研修を計画的に実施する。より効果的な個別教育計画を作成し、授業づくりや指導へ活用していく。

	視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価(3月30日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	将来を思い描き、自ら選び取ることのできる進路指導・支援を行う。	① 各学部においてキャリア教育の観点による指導・支援を充実させていく。 ② 各学部と進路支援班が協働して、進路につながる内容を授業に積極的に取り入れるとともに、小学部から高等部まで連続性のある系統的な指導・支援ができるようにする。	① 前年度の成果である「キャリア教育推進のポイント」を参考に、児童生徒の個々の将来生活を見据えた指導・支援を進める。 ② 進路支援班と連携し、各学部が主体となり、児童生徒の社会参加につながる指導・支援を実践する。各学部の実践例について共有する。	① 学校生活全般において、児童生徒の来を見据え、「キャリア教育推進のポイント」を踏まえた指導実践ができたか。 ② ・進路支援班と協働し、児童生徒の社会生活をイメージした社会とつながる指導・支援ができたか。 ・実践例を教員間で共有できたか。	① キャリア教育推進のポイントを参考にし、将来身に付けたい力を確認し授業実践を行った取り組みや「役割・仕事」「働くこと」についてそれぞれの段階に合わせた指導実践が見られた。 ② 進路支援班と学部が連携をし、生徒自身が将来目指す方向性を考え決定できるよう指導を行った。「進路だより」「分教室進路だより」でより具体的な進路情報の提供を行った。	① 将来生活を見据えた指導・支援を進めるため、現在指導している内容が将来身に付けたい力の何につながっているのか意識した指導を行う必要がある。 ② 進路支援班と学部の協働した取り組みは、高等部、分教室が主になったが、小学部、中学部段階での進路指導について、進路支援班との連携した取り組みを展開したい。	① 保護者アンケートにおいて「将来に向けて必要な知識技能を身に付ける指導を行っているか」の質問に86.9%ができており、将来を見据えた指導の実践について評価を得ている。	① 「将来身に付けたい力」を明確にした上で、段階に合わせた指導実践が行えた。小学部の生活、中学部の作業学習、高等部の作業の系統性について整理することが課題である。 ② 進路支援班と学部との連携や情報共有により、よりの確に生徒への進路指導を行うことができた。生徒自身が将来を考え自己選択ができるための手立てや工夫を協働して行った。	① 将来の生活をイメージできる授業内容を工夫し、児童生徒が自立と社会参加に向け主体的に考え、学ぶ環境を整える。 ② 進路選択について幅広く考え、いろいろな選択肢があることについて情報提供を行う必要がある。
4	地域等との協働	共生社会の実現に向け、地域の様々な人や機関との相互交流の活動を展開する。	① 学校運営協議会を通して地域との連携の充実化を図る。 ② 地域の各学校からの相談ケースに対応するとともに、支援教育体制の構築に向けて支援する。	① 児童生徒の学習活動に活用できる地域資源の情報を収集し、授業の実践を進める。 ② コンサルテーションの手法を活用し、定期巡回相談等を通して地域の各学校における支援教育の充実化に貢献できるような仕組みづくりを行う。	① ・地域資源の情報を整理し共有することができたか。 ・地域資源を活用した授業実践が進んだか。 ② 巡回相談により、地域学校における支援教育体制の充実化への働きかけができたか。	① 全3回の学校運営協議会を実施した。次年度、伊志田高校及び石田小学校との交流及び共同学習の実施に向け、検討していく予定である。 ② 試行的に実施した定期巡回相談では、RPDCAサイクルをもとに作成したプランシートを使って、各学校と一緒によりよい支援について検討することができた。巡回相談及び定期巡回相談は延べ100件実施。	① 地域学校との交流(石田小学校、伊志田高校)について具体的な実施に向け検討をすすめていく。その他、委員からいただいたアイデアを生かし、地域資源を活用していく方策を検討する。 ② 定期巡回相談を本格始動し、地域学校における支援教育体制の充実をはかる。	① CSにおける意見：伊志田高校部活動を通じた交流も考えられる。お互い歩み寄っていけるとよい。 ② CSにおける意見：次年度の定期巡回相談について活用を申し出ている学校がすでに10校以上ある。連携した取組みに期待する。	① 学校運営協議会を対面で実施できたことで、地域資源活用についての様々な意見やアイデアが出された。今後検討をし、次年度の具体的な取組みへつなげていく。 ② 試行的に実施した定期巡回相談では、課題を整理し、目的を明確にすることができた。	① 伊志田高校との交流及び共同学習に向けた検討を行う。二校連絡会を実施する。石田小学校との交流及び共同学習に向けた検討を行う。 ② 定期巡回相談を本格実施する。市町教育委員会と連携し目的を明確にした相談を行っていく。
5	学校管理 学校運営	すべての職員が教育課題を的確に把握し、当事者意識を持ち学校課題を組織的に対応・改善できる人材育成と効率の良い機能的な組織体制を作る。 安心・安全な学校づくりを行う。	① 安心・安全な学校環境の整備改善とユニバーサルデザイン化を図る。 ② 事故・不祥事防止に向けて、全職員が主体的に課題意識を持ち、より安全な学校づくりに向け、具体的な改善を実施する。	① 児童生徒が過ごしやすい環境整備に必要な改修とユニバーサルデザイン化を推進する。 ② ・不祥事防止研修の実施と有効性の検討を進め、教員の人権意識を高める。 ・安心・安全な学校環境の整備と改善に取り組む。	① ・児童生徒の発達状態の把握とそれに必要な環境設定の提案と改善がされたか。 ・学校環境のユニバーサルデザイン化が進んだか。 ② ・人権に配慮した指導や支援を行うことができたか。 ・各員が主体的に教育活動上の課題改善を実施することができたか。	① 各マニュアル、要項の見直しと改訂を行った。(会計、防災、福祉避難所初動対応等)特別教室の表示をピクトグラムのシンボルで表示した。 ② 不祥事防止研修会を年6回実施した。(そのうちリーダーが講師となった研修会は3回)グループ協議を行うことで、自分事として考える機会となった。	① 改訂したマニュアルについて、今後実際の活用を図り、検証する。児童生徒にとってわかりやすく学びやすい環境について再度確認をしていく必要がある。 ② 人権に配慮した指導について定期的に振り返る機会を設ける。ヒヤリハットの改善方法について全校で共有していく。また、職員間の確認のコミュニケーションについて徹底していく。	① 保護者アンケートでは「安全で安心して過ごせる環境の整備」について94.7%が評価している。コロナ禍での感染対策が適切に行われていたことへの評価と考える。 ② CSでの意見：ヒヤリハットへの取組みはどうだったか。有効に活用していくとよい。	① 年度途中で各マニュアルの見直し、改定を行った。わかりやすく整理されたと同時に実際に即した内容に改訂することができた。 各学部を中心に児童生徒にとってわかりやすく学びやすい環境について再度確認をし、整備していく。 ② 職場討議やグループ協議で意見交換が活発に行われ、研修会後のアンケートからも意識の高まりがみられた。ヒヤリハットに関する報告や全校で共有について不十分だった。	① その他の業務においても要項の見直しについて適宜行っていく。 わかりやすく学びやすい環境づくりについて、再確認をし全校で取り組んでいく。 ② ヒヤリハットの事例から見直しができる取組みを行う。職員間の確認のコミュニケーションについて啓発していく。